

東京最後の秘境のちょっとした異変

麻布十番の年間の最大のイベントは八月の第四金曜日から日曜日までの三日間に開かれる麻布十番祭りだ。その日が近づいてくると、商店街にはソワソワした雰囲気が漂つてくる。祭りの当日ともなれば、自動車は通行禁止になり、さして広くない通りの両側は屋台で埋め尽くされる。お好み焼き、焼きそば、チョコ・バナナ、カキ氷、ポテト団子、生ビールなど変わり映えのしないものばかりだけれど屋台がたくさん並ぶ。

さらに、それとは別に麻布十番の有名なレストラン、中華料理屋、天麩羅屋、焼鳥屋なども屋台を出すもので、大勢の外国人が見物に来るということと相まって、ちよつと変わった祭りの表情が生み出される。それが祭りの目玉になっている。十番通りはもちろんのこと、その一本奥に入った裏通り、十番通りと直角に交わる通りにも屋台が溢れる。^{あふ}

最近は、テレビや雑誌で頻繁に紹介されるものだから、この数年、外から的人がどんどん増えている。地下鉄の六本木の駅付近で、ツンツルの浴衣姿に興ずる外国人が目立つようになっている。そんな姿に刺激されてか、若い日本人にも浴衣姿が増えている。着付けが妙なのだけれど、どうもそれが最近のファッショնになつているらしい。見慣れてくると、そんなものかと苦にしなくなってしまうのだから、僕は節操がないのだろう。^{せつそう}

もつとも節操などに拘つていたのでは、いろんな格好の何万人の人が、この狭い東京最期の秘境にドツと繰り出してくるのだから、とてももつまい。祭りになつた途端に秘境は秘境ではなくなる。十番通りをわずか五十メートル進むのに一時間ぐらいもかかる事態になる。この雰囲気が良いんだ——こう言って嬉々とする人もいるけれど、僕はもう駄目だ。最近は、十番祭りの期間中は麻布十番からの脱出を決め込んでいる。

祭りが終わつて数日すると、後片付けも済み、漂つていた熱氣も鎮まつてくる。
そして秘境の雰囲気も戻つてくる。

そんな九月に入つて最初の土曜日の昼、久しぶりに友人の作家・杉田望と麻布十番のど真ん中にある小さな広場、「パティオ十番」で待ち合わせた。前日まで検査入院で小さな病室に拘束されっぱなしだつたので、気分転換したかった。いくら医者とも気心が通ずる馴れた病院でも嫌なものである。病室は綺麗だけれど、「病気」の「氣」が充满している。それが口や鼻ばかりか全身の毛穴から染み込む。だから一刻も早く身体を外気に晒し、「氣」を外に出したいという気分に襲われる。今回の検査入院でもそうだった。こういう時は、麻布十番を徘徊するのが一番である。

そうそう、報告しなければならないことがある。ちょっとした異変が麻布十番にあつた。「パティオ十番」に面し、タイムスリップ感覚を満喫させてくれた喫茶店が店を閉めてしまつた。儲かっているとは思わなかつたけれど、趣味でやつているようだし、潰れる^{つぶ}ことはあるまい。こう高^{たか}を括つていたところ、見事に期待を裏切られてしまつた。それで杉田とは、冷房がない「広場」で待ち合わせなければならぬ羽目に陥つてしまつた。

もつとも、ちようど第一土曜日で、ガラクタ市、正式に言うと「麻布十番のみの市」が「広場」で開かれており、退屈することはなかつた。何かいい掘り出し物でもないかと、時間をかけ、ひやかし半分で眺める。こういう時間の使い方が気軽にできるのは至福の極^{きわ}みである。

「何にもないなー」

「何にもないじやないかー」

突然、背後で大きな声がした。杉田である。いつものリュックとジー・パンのスタイルで現れた。腕時計を除けば、身につけているもの全ての合計は一万円にもならない、と豪語するスタイルである。

ちなみに杉田がしている腕時計というのは「インサイダー」の高野孟から貰った

たかのはじめ

香港返還の記念時計だ。「高かつたぞ！」こう高野孟は言つて、この腕時計を手渡し、杉田に「借り」を返したらしい。何の貸し借りだか分からぬけれど、二人は、よく「貸しだ！」「借りだ！」とやつてゐるらしい。腕時計の文字盤の中では、小さな登小平が手をチヨコチヨコと振つてゐる。いかにも高野好みの一品である。いま杉田が身につけてゐる物の中では、これがもつとも高価なモノであることに間違いはなさそうである。

その杉田の声で、ウサギが木の根っ子にぶつかって転げるのをジーッと待つ、そんな「待ちぼうけ」のスタイル氣で店番していた中年の婦人と若い男性、その二人が目を上げ、一齊に冷たい視線を投げてきた。直ぐ立ち去らないとやばい。ヤバことになりそうな気配だ。

「すぐそばに喫茶店を見つけたから、そこへ行こう」

まだ粘る構えの杉田を急かせ、早々に退散した。行きつけだつた喫茶店と広場を挟はさんで反対側の、狭い階段を上がつたビルの二階に向かつた。広場に面してゐるのだけれど、小さな看板が階段の足元に置かれているだけだったので、これまで店があるとは気が付かなかつた。

小さなドアを開け、店の中に入つて驚いた。骨董品というかガラクタでいっぱいだつた。窓際の二つのテーブルと、真ん中の一つのテーブル、それと手前の大好きなカウンターのところ以外は、所狭しとばかり家具や瀬戸物や身の回りの小物などが並べられている。壁にもいろんなものがぶら下がつてゐる。土蔵の扉とか浮きの大きなガラス玉とか古い薬の宣伝ポスターといったものまである。

カウンターには女性が一人座つていた。店主と、その友だちというか、常連という様子である。僕らは迷わず窓際のテーブルに着いた。「パティオ十番」を一望できる場所である。下を見ると濃い緑の間にガラクタがたくさん並んでゐる。

ついこの間までは目に眩まばゆいばかりの新緑だったのに、もう秋である。あとちよつとすれば、木の葉が落ち、冷氣を突き破るように枝がむき出しになるだろう。本当に時間の経つのは速い——。

「ウチも出しているですよ——」奥からの女性の声で現実に引き戻された。骨董品こうとうひんに関心があるとでも思つたのだろう。「抹茶がある」とメニューを見て杉田がいう。お菓子付きである。コーヒーよりは身体からだに良い。病院から出てきたばかりなので、すぐに身体からだのことについてしまう。「それじゃー、抹茶一つ」と威勢良いきなく大声で注文した。

抹茶を飲んで、水羊羹みずようかんをつまむ。悪くはない。杉田は、こんな甘いのを食べても大丈夫か、と心配そうに訊ねる。「大丈夫、大丈夫。しつかり計算済みだよ。食べるのは半分だけだよ」と明るく答え、新しく買い求めた機器で血糖を測定し、インシュリン注射をする。これが効き出すまでに約三十分。ここでちょっと時間をつぶし、それから天麩羅屋てんぷらやに行こうという算段である。

壁に掛かっているものや、床に置いてあるものを、あれこれ言しながら値踏みする。退屈することはない。聞けば、開店してから十年あまり経つという。煩わしいこともなく、これから使えそうな店である。

「どう、おやじさん、祭りで儲かつたでしよう」

「冗談じゃないですよ。忙しいことは忙しかつたけれど、人は雇わなければならぬし、出るものが多くて同じですよ。商店街の関係もあって仕方がないからやつているんですよ。もうただ、忙しかつただけ。焼き鳥屋なんかは、百万円以上を売つたと言つていますが、うちらは駄目ですよ」

「ハイ、雌鯛めごち。今日は良いのがありましたから、入れておきますよ」

「いいね——。で、ハゼもそろそろじやない」

「まだ東京湾のものは小さくて駄目だね。そう、あとひと月もすれば、いい形のものが出せますよ。もうちょっとですよ」

「嬉しいね。ところで、おやじさん。広場に面したところにあつた喫茶店、どうして閉めたのか知っている?」

「うーん。もともと洋服屋でね——。それが駄目になつたので、喫茶店をやつていたんだけど——。やっぱり駄目だったのだろうなあ——」

「えエ——。洋服屋だったの——」

「そう洋服屋。それを止めて、喫茶店も止めたのだから、あのビルは誰もいなくなつてしまつたはずだ。で、どうするでしょうね。それにコーヒーなら、豚カツ屋の先の店の方が美味しいよ。それもアイスコーヒーが。氷までコーヒーで作つているんだから」

「豚カツ屋が美味しいのは知つていたけど、隣に、そんな店があつたとは知らなかつたな——。そうだ、ついでに聞くけど、そこの角の蕎麦屋と十番通りの奥の蕎麦屋、もともと同じ店だつたのに、どうして仲違なかたがいしたのか、その理由も知つている?」

「や——。子供がいなかつたんですよ。それで番頭の——」

「やっぱり、そんなことだと思つたよ」

カウンターで天丼を食べながらの四方山話よもやまばなしである。今日は、いろいろ聞いてやろう、と決めていた。麻布十番に移つてきたのは昭和二十七年のことで、その前は、ずーっと、赤坂の山王下でやつていたという。

懐かしい。亡くなつた親父おやじは赤坂の生まれで好物が天麩羅てんぷらだつた。最期の入院前、親父を連れて行つたのも赤坂の天麩羅屋てんぶらやで、そこで、お袋ないしょに内緒ないしょで、これも大好きだつた熱燗あつかんを飲ませた。バレたらお袋がうるさいと躊躇ためらうのを、黙つてているから気になくていい。醒めてしまえば分からぬ。それに入院すると、しばらく美味しいものを口にできなくなるからと言つて勧めた。「それじゃ少しだけ」と、親父は本当に嬉しそうに飲み、ほんのりと赤くなつた。つい昨日のことのようである。

お袋は親父は助かるものと信じ切っていた。お袋自身も具合が悪かったので教えなかつたからなのだけれど、親父は末期癌だつた。それも、ある有名な病院で、手遅れで手術はできないと言われたのを、今ではもう一線から退いている名医の誉れ高い知人の大学教授に頼み込み、大手術をしてもらい、それで生き延びた後の再発であつた。「おまえの親父じや、嫌とは言えないよ」と言つて手術を受けた彼から、手術後、「できる限りやつた。でも、俺が保証できるのは最大で二年だ。それまでに間違ひなく再発する。再発したら、もう終わりだ」「しかし、よくまあ、こんなになるまで我慢したな——。やつぱり、おまえの親父だ」と宣告された。その通り二年目に癌は再発した。再発の状況をX線写真で見せられたけれど、本当にひどかつた。どうあがいても無理だつた。

この亡くなつた親父なら、若い頃、この天麩羅屋てんぶらの山王下の店に通つたように思つた。もう確認することはできないけれど間違ひないと思つた。

「おやじさん、話は違うんだけれど、このカウンターに凝つたね。この厚い一枚板、目も通つていて凄いね」

「檜ひのきですよ。前の持ち主が凝りに凝つて、カウンターには厚い檜の一枚板を持つてきて、それに見て下さいよ、この天井。これだつて拘こだわつて木の皮や小枝を取り寄せ化粧したんですよ。それを手に入れたんですけど、今じや、もう絶対に不可能ですよ。こんな店を作るのは」

待つっていましたとばかり、得意満面で説明する。こちらも今まで分からなかつたことが分かつて、至つて満足である。「これでまた話が書けるね」と、杉田が小声でそつと呟く。そう、話も書けるし、美味かつたし、言うことがない。

「ごちそうさま」「毎度あり——」で外に出た。

締めくくりに、天麩羅屋のおやじの言つていた喫茶店に寄つた。豚カツ屋の隣に

てんぷら

は、確かに喫茶店があつた。五、六人も入ればいっぱいになりそうな小さな店である。座ると同時に「アイスコーヒー、二つ」と注文した。それを飲みながら、置いてあつた工事中の麻布十番を通る地下鉄の内部の写真を見た。見学会があつて行つたそうである。そう説明する店のおやじに、天麩羅屋のおやじにアイスコーヒーが美味いって聞いたから来たと言つた。そしたら、おやじは怪訝けげんそうに、「へエー。毎日くるけれど、いつもきまつてホットだよ」という。「えエー」杉田と啞然あぜんとして顔を見合せた。

一九九七年秋 伴 友貴

(今は「パテエオ十番」広場の横の二階にあつた喫茶店も姿を消している。
天麩羅屋の親父も癌で亡くなつた。元気そうだつたのに、あつという間の出来事だつた。久しぶりに顔を出した時、店を継いでいた息子から聞いた。しかし、その息子も店を閉めるらしい。確実に時代は変化している。当たり前のことなのだけれど……。二〇〇〇年)